

明治期のきもの図案帳 『四季のよそほひ』

教授（日本服装史担当） 佐藤 泰子

彩色木版摺りの書『四季のよそほひ』は、本学図書館に2種所蔵されている。その一方は、縹色の無地の表紙の題簽に『四季の粧』と墨書きされたB5判をやや小型にしたサイズの書で、2頁2図の口絵に続けて、1頁に1図のきもの図50図を収める26丁の和綴きもの図案帳である（以下A書という W753.8-M-1-イ）。他方は、装飾文様のある表紙の色紙型に『四季のよそほひ』と版刷され、その真下に上または下と記されたA書よりわずかに縦長の上下2冊本で、上巻の所収内容はA書と全く同様であり、下巻はきもの図30図と飾り紋20頁170図を収める25丁の和綴本で、その奥付には明治38年4月8日再版発行とある（以下B書という W753.8-M-1-ロ、同2）。したがって、A書はB書の下巻に相当する頁を欠き、しかも表紙の状態からみて改装本の可能性も考えられる。それに対して、B書は完本であり、全貌が把握できる。ところが、彩色版本の生命ともいうべき各頁の摺り上りはA書が優り、よって、その刊年も明治38年以前と思われる。

本書の初摺りは、『模様雛形 四季のよそほひ』と題して、明治29年8月より毎月1冊計4冊が分冊刊行された（うち1、2を私蔵）。著作者、発行者、印刷者は、いずれも京都に在住し、順に、森雄山、芸艸堂山田直三郎、山崎安太郎（再版は発行、印刷とも芸艸堂山田直三郎）とある。しかし、初摺り本には特約販売所として、田中文求堂（京都寺町）、青木嵩山堂（大阪博労町）、嵩山堂支店（東京日本橋）、大倉書店（同）、東陽堂支店（東京神田）の各店が連記されているので、三都同時に発売されたであろう。

このような『四季のよそほひ』に所載される計80図のきもの図とは、各頁とも、19.7×14.3cmの枠（すなわち匡郭）の中に袖丈の異なる2種のき

もの背面図（振袖48図 留袖32図）を配し、各々に花鳥・風物・器物やそれらを取り合わせて、比較的大柄でありながら雅趣に富んだ模様を描いたもので（図1参照）、いずれも清明な色彩に溢れている。因に、各色数は4～9色である。

それを眺めていたある時、ある記憶が脳裏をよぎった。それには、江戸期に遡り、正徳3（1713）年刊行の『正徳ひな形』（全5巻5冊）^{注1}に原図があったのである。80図のうち65図が全く同じか、幾分簡略化されていても極めて近似している（図2参照）。『正徳ひな形』は、自ら大和絵師と称した西川祐信（1671-1750）の筆に成る。祐信は、京都に在って狩野派や土佐派の画風を学び、後に小袖雛形本のみならず、小袖染織の美と着装美、さらに女性美とを一体化させて『絵本浅香山』『絵本常盤草』などの風俗絵本を手がけ、肉筆美人画にも秀でた絵師である。江戸期の小袖雛形本の大半がそうであるように、『正徳ひな形』も、墨一色摺りで、序文と跋文を所収し、小袖各図の上部に通し番号と、余白に地色・模様名・加飾法を書き添えているが、加えて、祐信は自序に「その人其位ほどほどありて、似あひたるありにげなきあり」と向き不向きに触れ、御所風・お屋敷風・町風・傾城風・遊女風・風呂屋風・若衆風・野郎風および紋帳に分類して、各着用者の項の1頁目にそれぞれの姿絵を収め、次いで12図ずつの小袖図を描き分けている。

近世の泰平の世を映して、小袖染織は折々の美を追求し、多彩に豊かに変遷した。やがて、西化が近代化への急務として奔走した明治初期、装束や紋付を洋装に改めたことによって小袖の名は消滅し、代って、西洋服（洋服）に対応させて、日本人の従来の着物である日本服（和服）に着物の呼び名が広まった。『四季のよそほひ』では、時

代の要求に即して、類別を取り除いて好ましい図案を選び出し、任意に配列した。その結果は、遊女風と「ゆかたもよう」の内題をもつ風呂屋風を1図も含みず、そのほかの図は、各項ほぼ同数を掲載した。

西洋崇拜に押された明治前半の停滞期を経て、20年代半ばを過ぎる頃より、徐々に、種々の様式の彩色本が時流を告げることになる。例えば、まず舞い散る桜の花びらを叙情的に描き、それから先の頁には、紅白の細網にきものを引き掛けた元禄前後の小袖幕を画面に鮮やかに再現したものや、模様の間を飾る裾の部分を1頁に拡大して精緻な筆をふるったものなど、個性的な作品集でもある図案帳の出現が注目を惹く。一方で、当時から今日に至るまで、江戸期と同一書名の完全な複製本、あるいはその文字部分を省き墨一色摺りの小袖図のみを収めた書も出版されているが、それらは創

作のための参考書であり、また研究用の資料といえる。初刊明治29年の『四季のよそほひ』は、口絵の1頁目に美しく着飾って次頁に向かう被衣姿の祐信画風のふたりの女性、次頁に満開の桜を覗かせた花見幕を描いて明治の気分を漂わせながら、きもの80図は小袖雛形本の彩色版に徹している。したがって、この書は、彩色創作画集と複製本の間に位置づけられ、その類例は少ない。明治38年の再版は、この書の人気を根強さを物語る。

当時、三越では、洋服店を閉鎖し呉服店に意匠部を新設して福井江亭ほかの著名画家を採用（明治28年）、きもの新柄や流行に関するPR誌の発行開始（明治32年）、きもの彩色図案の公募開始（明治35年）などと新事業を推進させていた。流行は、やがて元禄風・桃山風へとますます高揚する。

注1) はくおう社より昭和47年複製(W753.8-1)

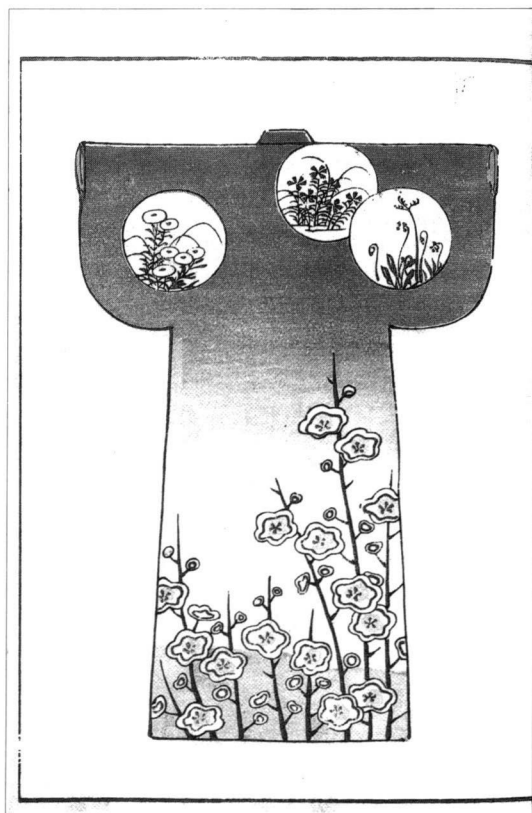


図1 明治38(1905)年刊『四季のよそほひ』
肩の地色は薄紫、光琳梅の座(芯)に黄色



図2 正徳3(1713)年刊『正徳ひな形』傾城模様